

特集 ■ 法然上人八百年御忌、浄蓮寺開創八百年

# 念仏すけささぬ人(二)

## — 角張成阿のこと —

東北大学名誉教授 高橋 富雄

### 摩訶部敬仏の証し人

学生骨(こつ)になりて

念仏やうしなはんずらん

(念仏の行者が學者ぶるようになって、肝腎の念仏の心がどこかよそへ行ってしまうのです)

「上人つねに仰られける御詞」の中のご法語は、この時の、この人についてのものではなかったか。

そうまで思われるような真に迫った物語が、弘願本『法然聖人絵』というものの中の一節「常陸敬仏房との問答」にときがたられています。

そして、あたかもその歴史の証人然たるいでたちに、わが角張成阿が軍記物『源平盛衰記』巻第九「堂衆軍(いくさ)の事」の、かの甘糟太郎忠綱武士道往生物語のくだりに、さりげない風情に登場するのです。

『評伝角張成阿弥陀仏』ご参照下さい。「上人、大谷の庵室に縁行道縁側行道法会) し給ひけるが、折節候ひける摩訶部の敬仏、かくはりの浄阿弥陀仏を呼び出して」とありますから、一見たまたまの同席のように

も見えます。しかし実は見えない手で、二人は、いや師弟三人は、必然に結ばれていて、ただ物語だけが、それに気づいていなかったのです。

「ある日の角張、無心ころある風景」です。師法然も、同法摩訶部も確かに見て、しかし何一つ語るところないからです。

摩訶部敬仏。常陸国真壁郡の人。高野僧都の令名をうたわれた空阿弥陀仏明遍の高弟。その一の弟子を以て自他共に任じた一代のエリートです。有名な浄土教法話集『一言芳談』など、この師弟法話を中心に組み立てられ、法然上人のようなお方も、高貴な客分として敬して遠ざける扱

いになっていきますから、ブームの波に乗った時代の寵児の観があった人です。

「絵物語」はこの寵児のその名をなす前の修行時代の一齣です。上人問ひて云く、何処の修行者ぞ。答へ申して云く、高野よりまいりて候。又問ひて云く、空阿弥陀仏はおはすか。答へ、さ候(健在です)。其の時仰せられて云く、な

にゆへに是へは来給へるぞ。只それこそおはさめ。源空は明遍の故にこそ、念仏者にはなりたれ。「明遍僧都はこの源空などより、ずっと立派な方であられる。その良師に師事しておられて、何の不足あつてここに参られたか。ここでは何も学ぶものはないはずだ。高野山以上のところはないはずだ。高野念仏の何たるか、その師明遍の何人たるか。その弟子の何者であり得るかを、すべて見通しての反語(アイロニー)です。逆説(パラドックス)です。法然上人には珍しく刺があります。でも、上人にはこの人たちに対しては、このように構えねばならぬ必然性もあったのです。「四十八巻伝」巻第十六は、上人と明遍の間の念仏問答を伝えて精彩突々たるものがあります。明遍「このたびいかがして生死をはなれ候べき」。法然「南無阿弥陀仏と唱へて、往生をとぐるにはしかず」。問「たれもさは見をよびて侍り。ただし念仏のとき、心の散乱し妄念のおこり候をば、いかがし候べき」。答「心はちりみだれ、妄念はきをひおこるといへども、口に名号をと

都を見送つて、

上人「心をしづめ妄念おこさずして念仏せんとおもんは、むまれつきの目鼻をとりはなちて念仏せんとおもんはんがごとし。あなごとごとし」。敬仏房はこの師を背後に背負つて、今、上人の前に立つていたので。その顔に師の書かれざる文字の浮かぶのを、心眼に読んで、上人は言下に「おかえりなさい」と言ったのです。事実、この人は、やがて『一言芳談』にこう語り残すのです。

今生は一夜のやどり、夢幻の世、とてもかくてもありなんと、真実に思ふべきなり。後世を思ふ故実には、生きてあらんこと今日ばかりただいまばかりと真実に思ふべきなり。かく思へば、忍びがたきこともやすくしのばれて、後世のつとめもいさましきなり。それがしは三十余年、此の理をもて相助けて、今日まで僻事(ひがごと)をしいださざるなり。

「愚痴の法然」「無智の源空」は、こういう「いさましき」ことは言わなかつたのです。それは「ごさかしく機の沙汰をするものだ」。師上人のかたわらに常に侍して、成阿はその心をそう読み取っていたのです。その目で敬仏房をじっと見つめていたのです。そして無言だったのです。成阿はこういう語り手でした。

はなればなれに、